Project	地域協働専攻　国際協働グループ
E04	**函館の国際交流の課題研究** **～はこだて国際民俗芸術祭を手がかりに～**
メンバー	[学　　生]　上山　旺奨/城戸　桃子/吉井　さつき [担当教員]　河　錬洙

【背景】

函館市の元町公園で毎年８月５日から通常１週間開催される「はこだて国際民俗芸術祭」が研究のフィールドである。昨年度は「函館の国際交流の現状と課題」のテーマをもとに、現場での国際交流をスタッフの役割から体験し、学生なりの視点で以下を函館の国際交流に必要な視点として結論づけた。
（現状）芸術祭に関わる人々の想いを記録し、引き継ぐ次世代の存在が必要とされている。*
（課題）今後の次世代を担う可能性がある本プロジェクトの活動方針が曖昧で、計画を立てることすら難しい。
*補足：昨年度の「地域プロジェクト成果報告書(A-12)」の「次年度の活動提案」から修正・進展があります。

【目的】

はこだて国際民俗芸術祭」が100年続くために、
① 芸術祭に関わる学生（次世代）の声を記録し残したい。
② 今後の本地域プロジェクトに、芸術祭継続の効果が高まる活動を提案したい。

【概要】

前年度に引き続き2名、新規1名の計3名で活動する。期間は2023年4月から2023年9月（前期）である。昨年の活動で発見した気づきから、研究テーマの成果の解決につながる提案（来年やりたいこと）を芸術祭運営スタッフ側と共有した。今年度はそれらを運営側・現地プロ2年生と協力して実行することで、より精度の高い解決案を示す。

【プロセスと成果】

【成果 1】

【成果 2】

【成果 3】

成果１：4月から後輩の地プロメンバーと積極的に繋がり、WMDF事業側と構内説明会の企画の接続・開催

成果2：掲示の少なかった五稜郭周辺の建物をメンバー全員でお願いに回り、新たな掲示所4つを開拓した。

成果3：MTG初参加から、芸術祭終了までの学生スタッフのようすを撮影し動画にまとめ、SNSに記録。

成果4：芸術祭期間中に、WMDF公式Instagramと本地プロアカウント【@hayonsu.chipro_15】を共同投稿で連携させ、発信効率を向上させた（ストーリーでリアルタイムのスケジュール配信という新しい試みも）。

① 本地プロアカウントに学生としてのWMDFへの取り組みや思いが蓄積されている。

② WMDFと協働して活動する際に外せないと考察した項目を、以下【統括と反省・今後の課題】に今後のメンバーに活動案として提案する。

【総括と反省・今後の課題】

1. 次年度の地プロでの活動に自らの経験を生かしてもらう

   そのためには、後輩とのコミュニケーションの丁寧な積み重ねが欠かせない。例えば、昨年度の説明会で行った内容を2年生に共有する方法が分からず告知が遅れ、昨年より参加者が減少した。その背景に、運営と彼らに接点を作りつつ、3年生がどこまで企画に関わって良いのか理想の状態を設定し切れなかった点がある。それを踏まえ、スタッフ説明会を経験した学生が2年生の悩みに答えながら企画立案を手助けする手順を解決策として挙げたい。4月からWMDF側とつながることで、本プロジェクトの計画を立てるよいスタートにつながり持続性が高まると確信する。

2. 芸術祭成功の背景に関わるスタッフの参加動機に焦点をあてる

   今回の動画では、地プロメンバーのWMDFに対する反応と感想を記録した。目的は、今後のスタッフ説明会でスタッフのやりがいをリアルに感じてもらうためである。メンバーの留学の関係で記録内容を深めるまでには至らなかったが、後期も継続していれば、函館に住む大学生がWMDFスタッフの役割にどんな意義を感じるのかじっくり話す時間をとっていた。その考察をもとに、いまの大学生に響くスタッフの魅力ややりがいの伝え方を工夫することで、次世代を担うWMDFスタッフのリーダーが育つ可能性が高まるのではないかと予想する。

3. SNSの閲覧者にファンをつける

   成果からもわかるように、2023年の芸術祭ではSNSの機能を「記録と連携」を目的に使用している。これは、昨年度のアカウントを引き続き使用したことから、SNS使用の目的を「発信」から「記録」に転換させて得た気づきである。よって、今年度は閲覧数より投稿する内容をできるだけ時系列に、活動内容を後から見ても理解できるようスピードを重視した。さらに、この新たな挑戦で、スタッフと運営側が投稿の共有作業に慣れることができた。この経験を踏まえて、来年度以降は閲覧者の存在をより意識し、「学生がWMDFの活動に参戦している姿」 でより広い年代に芸術祭と本地プロが応援されるシナリオを作れないか検討したい。
   （ファン数値測定方法の例）Instagramストーリーのタップ数：現在1ストーリー3タップの変動を観察

【地域からの評価】

WMDF（World Music and Dance Festivalの略）
Coreメンバー地プロ担当：柴田　英実　様より
担当者として準備期間中や芸術祭期間中、学生のやりたいことを率先し、自立して活動してくれることがとても助かりました。当日のボランティアスタッフという関わりだけでなく、動画などの成果物を残してくれたことに心より感謝しています。今回のように３年生が引き続き関わってくれる事で、前年にできなかった課題等を克服したり経験を活かせたりしたのは大きいと思いました。
コロナ禍で芸術祭を通常開催できず、地プロとの繋がりを再構築する必要性がある中、２０２２年は３日間の開催という中で、学生が主体的に率先して活動し、2023年は芸術祭を経験している3年生が2年生を繋いでくれたおかげで最初の説明等が省かれ、説明会の準備やポスターの配布のサポート、インスタグラムでの共同投稿など、今までにないほど地プロと実践的な活動ができたと思っています。
今年も2023年の芸術祭を経験した学生が、個人でもスタッフとして関わってくれることを切に願います。

【その他】

▸地プロでのチームワークについて学んだこと

・昨年度から引き続き、1つの行動計画に2-3名のチームだった。この人数だと小回りがきき、全員がそのテーマに参加できる（リーダーが困らない）。

・地プロ内でのグループ分けに関係なく、メンバー全員のスタッフ参加を強く勧める。設定テーマに必ず繋がるため、最終的にwin-winである。

▸今後の取り組みについて

2024年に取り組みたいことは、芸術祭に参加する学生スタッフに焦点を当てたインタビュー・記録である。それらから芸術祭に関与して得られる利益・価値を考察し、今後の大学説明会の資料として運営側に提供したい。

なお、今後は地プロとしての継続はせず個人の希望で活動を行うものとする。すでに、今年の芸術祭へのスタッフ参加を希望しているメンバーもいる。